

夏期企画展

『中川珠世 切り絵の世界展』

— ライチ ヨウからの贈りもの —

切り絵作家、中川珠世さんは、学生時代から山岳部に所属し、多くの山々に登ってききました。現在、北アルプス唐松岳頂上で山荘を経営するご主人と白馬村に暮らし、その作品には、山荘周辺で身近に触れ合ってきた自然との様々な思いが託されています。自然の中で生きることの素晴らしさだけではなく、厳しさも体験してきた中川さんだからこそ、山に生き抜く生き物達へ向けるその愛情は深く、確かな共感に基づいています。

なお、本企画展にあわせて、都留の山々から富士山を撮影した写真を展示します。周りを山に囲まれた都留の自然の素晴らしさに、改めて目を向けてください。

会期 8月5日(土) ~ 9月3日(日)

開館時間 午前9時 ~ 午後4時30分
(入館は4時まで)

休館日 毎週月曜日

入館料

一般 300円(210円)
高校・大学生 200円(140円)
小・中学生 100円(70円)
()内は、20名以上の団体料金



運命の日
【天敵「おこじょ」との遭遇】



深山東菊の咲く散歩道【幼鳥】



クロユリ

次回企画展

『八朔祭屋台 飾幕展』

会期 9月8日(金) ~ 24日(日)

第四回芭蕉月待講座

『野ざらし紀行』を

めぐる疑問

— 甲州にかかわる句群 —

日時 8月22日(火)

午後6時30分 ~ 7時30分

会場 ミュージアム都留

講師 楠元六男氏

(都留文科大学教授)

受講希望の方は、左記の申込先までご連絡ください。

申込・問合先

都留市博物館

「ミュージアム都留」

☎(45)80008
☎(45)86008



新町屋台後幕「鹿島踊」

ミュージアム都留寺子屋講座より

先月につづき、第二回芭蕉月待講座の要旨をご紹介します。

芭蕉・霽野 — 谷村での句作さまざま

天和三年(一六八三)、芭蕉は、俳諧の弟子であった高山伝右衛門(俳号霽野)の案内により、弟子の芳賀一品とともに、谷村を訪れました。

この来訪の時期については、正月早々という意見もありますが、芭蕉の有力な弟子であった宝井其角が芭蕉の追善として編集した『枯尾集』に、「夏の半ばに、甲斐が根にくらして云々」とありますように、初夏のころであったと思われます。

天和二年暮れの大火で、秋元家の上・下屋敷も罹災したため、藩邸の再建のために奔走しなければならぬ立場であった国家老の霽野が、芭蕉を谷村に案内できるようにしたのは、これらの仕事にめどが付いた後のことと考えるのが自然と言えます。

谷村で、芭蕉は「夏馬の遅行我を絵に見る心哉」という句を詠んでいます。これは当時江戸で流行していた、漢詩文調の俳句の影響が感じられる句であり、また「我を絵に見る」という独特の表現は、同行した門人の芳賀一品が絵師であったことによるものと考えられます。

芭蕉は、後に漢詩文調の句をすべて詠み直しており、この句も「馬ぼくぼく我を絵に見る夏野かな」という句に作り変えています。しかし、「馬ぼくぼく」の句は、芭蕉一行が広々とした夏野をゆつたりと歩むイメージに対して、「夏馬の遅行」に感じられるのは、険しい山々とその間を進む馬上の人物の姿を描いた、中国の文人画のような世界であります。

江戸からはるばるやってきた芭蕉の心意気を読みとることができるこの作品は、荒削りではありますが、都留市にとって最も重要な句であり、再評価されるべきものと言えます。

貞享年間以降、霽野の俳句は認められませんが、これは、大火の後、霽野が秋元家の財政を建て直すために日々追われ、俳句どころではなくなってしまったためと考えられます。

その後の霽野は、芭蕉と次第に疎遠になってしまいました。



楽山公園に建立されている
「馬ぼくぼく」の句碑